

質疑応答

岡 細見さん、どうもありがとうございました。たしかに子ども向けのシオニズムのお話と、最後の『滅ぼされたユダヤの民の歌』では、すごいギャップですね。雪だるまの「ひと」は私も読んで感動しました。いい話ですよ。

カツェネルソンがワルシャワ・ゲットーに入れられたのはいつですか？

細見 1939年9月1日にポーランドに侵攻があって、カツェネルソンはワルシャワに逃げていくわけですよ。1940年11月にワルシャワ・ゲットーが完成しています。だから、ゲットーが作られる以前のワルシャワに移住していった。カツェネルソンは先にワルシャワにいましたから、そこで家族と一緒にあって、その後ゲットーが作られて、そこで暮らすという形ですね。

岡 ワルシャワのユダヤ人がゲットーに入れられるのが41年2月頃からだから、そのときに入ってということですね。そこから……？

033

細見 ワルシャワ・ゲットーにいて、ゲットーの1943年の4月蜂起の直前にアリア人地区に一旦逃れます。さらにその後ヴィッテル収容所に運ばれる。

岡 それが1943年10月。

細見 そうですね。

岡 それで、このシオニズムをヘブライ語で描いた子ども向けの作品は、いつ頃書かれたかというのも、全く分からないのですか。

細見 分からない。調べがついていないです。少なくとも1939年以前としか思えない。

岡 ワルシャワ・ゲットー以降はイディッシュ語でもっぱら書いて、へ

ブライ語では書いていない？

細見 『ヴィッテル日記』、ヴィッテル・ダイアリーというのがあって、その日記はヘブライ語で書くんです。ヘブライ語で日記を書こうとして、その日記で書きたかったことがあるんですね。そこが多分書けなくて、もう一度、今度はイディッシュ語でやり直したのが『滅ぼされたユダヤの民の歌』です。

岡 カツェネルソンは子ども時代からヘブライ語教育を受けていたわけですが、それはどういうヘブライ語だったのでしょうか。

細見 お父さんが元来は作家志望だったんです。実際に作家としての活動もしていて、それでお父さんがそういう意味でのシオニストだった。それで、お母さんの家系はラビの家系で、お父さんの家系もラビの家系でした。それで、幼少期から家庭教育がヘブライ語だったんです。

岡 その時のヘブライ語は聖書ヘブライ語？

034

細見 いや、聖書ヘブライ語ではなく、やっぱり復活していく現代ヘブライ語でしょう。作家仲間が使っているヘブライ語ですね。

岡 10歳頃ということは、1890年代半ば頃からそういう形で、現代ヘブライ語が流通していた、ということですね。ウッチで運営していたヘブライ語学校もそういうものですね。

細見 そうということですね。最初は、幼稚園とかだったんです。幼稚園をギムナジウムとかに拡充していったんです。そういう点では一族のみんなが協力していたみたいですね。

カツェネルソンはとにかく若い頃から目立っていたようです。今読んでる伝記のところではカツェネルソンが兵役にとられて、これでは危ないということで、カツェネルソンをその軍隊から奪い返すために賄賂を使う。そうすると9000ルーブルいるという話になって、どうやって9000ルーブルをかき集めるかで苦労したという話がある。とにかく実際に作家協会とか親戚とか、いろんなところから9000ルー

ブルを集めた。結果的にカツェネルソンはその賄賂で軍隊から逃れられた。病気だという偽の診断書も医者から書いてもらった。だからそういうことも一応できたようですね。9000 ルーブルが今どれぐらいかは正確には分からないのですが、多分、1000 万円くらいではないかなと。それぐらいのお金がある人は何とかできたということですね。

岡 ヴィッテル・ダイアリーをヘブライ語で書きながらも、それでは書けないことがあったからイディッシュ語で『滅ぼされたユダヤの民の歌』を書いたとすると、カツェネルソンにおけるヘブライ語とイディッシュ語のあり方はどういうものなのでしょう。

細見 それを考えていて、今全体を調べているのですが、ワルシャワ・ゲットーでイディッシュ語で作品を書いたのは、一つはやはりヘブライ語よりもイディッシュ語ができる人たちが多かった。そのときの子どもたちと芝居をしたりする上では、やはりヘブライ語よりはイディッシュ語だったという、実際上の意味はあったと思います。

けれども、どこかイディッシュ語の方が彼の心の機微に触れるところがあったというのは否定しがたい。ただ単に聞き手がイディッシュ語の方が堪能だったからワルシャワ・ゲットーでイディッシュ語になったというよりも、いざ本当に切迫したところでどうかとか、それこそ遺書は何語で書くか、遺書は公式だからむしろヘブライ語という場合もあるかもしれないですが、ラブレターならどうかとか。やはり自分の気持ちに一番寄り添ったときに、イディッシュ語だったということもあるのではないかという気はしますね。ただ、そう簡単に言い切っていないかどうか。それはやはりヘブライ語の作品をきちんと読まないと言えないなと思います。

035

岡 いくつか分らないけれど、これだけ観念的なシオニズム、エレッツ・イスラエルへの憧憬を語っていた人が、逆になぜ収容所で、でもエレッツ・イスラエルにはユダヤ人がいる、という希望的発想にはならなかったのでしょうか。つまり、自分がここで滅びてもそこにユダヤ人がいるんだ、生き続けているんだというふうな発想にはならなかったのでしょうか。

細見 カツェネルソンの一番下の若い弟は早めにイスラエルに渡っていて、生き延びているんですね。それから、さっき言いました伝記を書いた妹さんも、おそらく第一次世界大戦までのカツェネルソンを書いているので、彼女もその時点で南米かどこかに移住した可能性が高いですね。だから自分の一族の中でも、かろうじて何人かは生き延びているということが言えたかもしれないけれど、でも、やはりブルリン・ゲットーが解体され、ワルシャワ・ゲットーも解体され……という状況の中で、アメリカとかイスラエルで少数でもユダヤ人が生き延びているからそこに希望を託すという発想はなかったんですね。

きょうお話した『シヨア』でもそうですが、シオニストのリーダーが、いや大丈夫だよ、我々が一生懸命シオニズムをやってきたからたくさんイスラエルに行ったじゃないかというようなところに希望を持っている様子はかけらもない。むしろお前たち何をやっているんだっていう、裏切られた感覚ですよ。俺たちはもうこっちに残るってシオニストのリーダーが言っているんですから。残って死ぬと。シオニストのリーダーがワルシャワで最期にそんなことを言ったというのは、シオニズムにとってはやっぱり結構厄介な証言ですよ。『シヨア』はそういう証言も残している。

ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅だけれども——それもある意味裏返し of ヨーロッパ中心主義というところもあるかもしれないけれども——、やはり少なくともイディッシュ語を話し、シュテートルの生活があるというような感覚で捉えられているユダヤ人というものは、もう存在しなくなった、これは絶滅だという感覚ですよ。

岡 アメリカのワシントンにあるホロコースト・ミュージアムには、最後にまさにそのコーナーがありますよね。イディッシュ語共同体の絶滅を追悼するコーナーが。

岡崎 ちょうど一昨年、ワルシャワに行くことがありまして、ワルシャワ蜂起博物館を訪れてよく分かったのは、ナチとロシアに挟まれているわけですね。ゲットー蜂起もそうだし、その後のワルシャワ蜂起もそうだけれども、やっぱり独特の閉塞感というものが東ヨーロッパには凄くある。フランスの対独闘争だとレジスタンスはするけれど、そ

の後ろ盾としてイギリスが存在し、結局ハンナ・アーレントもアメリカに行くわけですから、何か背後から助けてくれるという感覚がある。それに対して、前方だけでなく背後も敵だという感覚、そういうものが実は私の専門にしているシリアにもあります。東ヨーロッパからシリア、アフリカ、たとえばエチオピアなどは西側諸国とロシアに挟まれています。トルコほど強力な中央集権国家ではない場合の中堅国以下の人々の寄る辺のなさゆえの閉塞感というものがあるような気がします。だから「滅ぼされた」というここまで極端な話が出たときに、出口が見えないこの感覚というものが、彼の瓶に詰めた紙に託されているような気がします。それ故の観念性というものがあるけれど、やはりその観念性を産んでいるのは、ワルシャワとか東ヨーロッパの状況も無関係ではないのかなと感じました。

細見 カツェネルソンのシオニズムは、少なくとも今回紹介しました『夢においても、目覚めにおいても』の3つの作品には、なぜイスラエルの地が必要かということがあんまり語られていないんですね。こちらでは迫害されているからとか、こちらでは自由がないからとか、そういう理由ではなくて、もっと純粹に自分の本来性みたいのがそこにあるというようなものなんです。少なくともこの子どもたちの物語集には社会的な問題はほとんど出てこない。唯一、経済格差みたいな話が出てきて、裕福なユダヤ人の家の有り様と貧しいユダヤ人の家の有り様を書いてあるぐらいで、全体として異教徒との関係がどうだとかそんな話にはなっていない。だから、わざわざエルサレムに行く現実的な必要というのがよく分からない。でも、だからこそピユアな要求、欲望のような感じで書いてあると思う。そして、それがもう、惨たらしくもホロコーストで完膚なきまでに打ち砕かれてしまうという、そういう感じです。

渡部 「メシアの来るときまでです」というやりとりがあります。ユダヤ教におけるメシアの徴は何になるのでしょうか？ つまりメシアの到来はどのようにユダヤ教徒に分かるのでしょうか？

細見 結局サバタイ・ツヴィ^{※24}もそうでしたが——ユダヤ教にとってはイエ

ス・キリストもそうでしたけれど——メシアだと自称した者はだいたいの偽メシアなんですよ。だから難しいですが、本当にメシアだったら、世界中が動転するくらい何かとんでもない形になるのだろうと、つまりその疑いの余地なんてありえないくらい明明白白としたことが起こるといふ想定じゃないでしょうか。でもサバタイ・ツヴィもそういう感じで、運動が大きくなったわけですから、本当に難しいと思います。簡単に「私はメシアです」という徴があるわけではないので、実に危ういところですよ。でも、おそらく本当のメシアであれば、それは疑いの余地なしに分かるという前提だろうと思います。

岡 ナザレのイエスは自分のことをメシアと言いましたっけ？

細見 自分ではメシアと言ってないけれども、キリスト教はそういう扱いをしていますね。

岡 だから、「キリスト教」なわけですが……。

038

菅野 メシア観と言うとやはり、ダビデの家だというのがあるので、結局は剣を持って抑圧している王、例えば中世であればイスラーム王国を転覆させてくれる、そんな存在を望んでいたとか。ただ、そんな小さな共同体からどうやって出てくるんだという話ではあります。だからサバタイ・ツヴィとかも人気が出たのではないかと。

岡 カツェネルソンがこれらの物語を書いたのは、ちょうど100年ほど前になってしまうけれども、ここで「メシアが来るときまで」というように、メシアを待ち望んでいる人もいるわけですよ。そのメシアの徴はやはりダビデの家系で剣をもって、ということですか。

菅野 どうなんですかね。現代においてはむしろキリスト教側の考えが、キリスト教観を持ったメシアニック・ジュダイズムというのが布教されて、取り込まれていってはいますけれども。結局、終末論的なところと重ね合わせられているので、この地上でのというのは、今パッとはいまいつかないです。

岡 超正統派のユダヤ教徒の人が言っていたのは、メシアの到来は超歴史的な時間の中で起こることだから、現世の中では起こらないと。そういう感じですか。

菅野 そういう人たちもいますよね。

岡 ちなみにダビデの家系は今も生きていますか。イスラームだと、ムハンマドの子孫はいっぱいいるんですけども、ダビデの一家はどうなのでしょう。

菅野 系図的には多分途絶えています。

細田 シオニストとしてのカツェネルソンについてですが、(シオニズムは)やはり運動としては世俗的というか、ユダヤ教というよりはむしろ民族としてのアイデンティティを強調しているということで、人によってはユダヤ教なんて捨ててしまえというようなことを言っていた人たちも結構いたと思うのですが、その中で宗教を拠り所としたカツェネルソンが自分はシオニストだと言っているときに、例えばエルサレム、パレスチナで活動をして、他の人たちのユダヤ教との距離のとり方を見て、何か自分と違うのではないか、自分の思っているようなシオニズムではないのではないかと疑問に思ったりしたということが出てくるような資料はないのでしょうか。

039

細見 カツェネルソンがはっきりと自分のシオニズムはこうだ、と書いている評論みたいなものがあれば分かるのでしょうかけれども、そういうものに私はまだ行き着いていません。基本的にはカツェネルソンは世俗的な人です。聖書、特に預言書とかが好きで、それを改めてイディッシュ語に訳したりしているんですね。エゼキエル書をイディッシュ語に訳していたものが、芝居なんかにもそのまま使われているんです。ヨブ記をヘブライ語からイディッシュ語に訳すこともしていて、それを活かしながらやっているんですね。けれども、そのときの聖書というのは、信仰の書というよりは民族文化の結晶という扱いになるだろうと思います。先に言いましたようにカツェネルソンはロシア革命

にも惹かれて、普通に現代人なわけです。親の世代ともそれはかなり違ってきている。お父さんも小説を書いたりしている人なので、ある種世俗的な生活が始まっているのですけれども、でもカツェネルソンも自分の周りには正統派ラビの人たちがたくさんいて、その人たちがタルムード論議を交わすのを見て、若い頃からそこにも深い感銘を受けていたようです。つまり、信仰というよりはユダヤ人の生活の中に浸透している宗教世界というもの、それにはやはりすごく大事なものがあろうというふうにカツェネルソンは考えたと思います。だから、正統派的な信仰ではないけれども、しかしユダヤ人の文化生活、精神生活にとってユダヤ教というものが非常に大きな意味を持っているということは認めていた。それを大事にしたいと思っていた。

岡 「民族としてのユダヤ人」というのは、やはりシオニズムですよ。先ほどある意味、ヨーロッパ中心主義的でもあるとおっしゃったこととも重なるのですが、ヨーロッパ以外の、例えば中東イスラーム世界にもアラブ人のユダヤ教徒もいるわけですよ。そういう人たちの存在をカツェネルソンはどう考えていたのでしょうか。彼らも「民族としてのユダヤ人」の中に包摂して考えていたのでしょうか。

040

細見 そういうあたり、もう自分たちの共同体が丸ごと滅ぼされていくというときに、人は本当にどう思うかなんですね。もう少し余裕のある状態のときのアイデンティティ感覚としては、ユダヤ人というのは東ヨーロッパだけではなくて、例えばイスラエルも含めて世界中の、アフリカであったり、中米であったり南米であったり、そういうところにユダヤ人もいるよね、それも同じユダヤ人だよなというふうなことが言えたとしても、でも自分たちのコミュニティとして、それこそワタンとして考えたときの共同体の構成員としては、もうそういう感覚では捉えられなかったのではないかと思います。やはり、シナゴグを中心とした、シュテートルといったあたりで考えられている共同体。ワタンというときに、観念化するとカツェネルソンのシオニズムの作品に出てくるようなイメージにも繋がっていくけれども。だけど、こういうホロコースト下で、最後に何を言葉にして発するかといったときに出てくるワタンは、もう少し生活と具体的に繋がったワタンで

しかなかったということじゃないかと思います。

岡　そこはすごく重要なポイントだと思います。それで私の質問は、ホロコーストに見舞われる以前、アメリカにもいるし、南米にもいるし、あるいはイスラエルにもいると言ったときに彼がイメージしていたユダヤ人というのは、ヨーロッパから移民していった人たちではないかと思うんです。その人たちと、歴史的に中東イスラーム世界にいたユダヤ人とはまた別だと思うので、ユダヤ民族というふうに彼が考えた中に、ヨーロッパではないユダヤ教徒の存在というのは入ってなかったんじゃないかと。

細見　入ってなかった可能性はありますね。そのあたりはもう少し他の作品を読んでみないと分からないですね。少なくともワルシャワ・ゲットーの作品を読む限りそういう問題は出てこない。

岡　従弟さんはどうなんですか。

細見　バール・カツェネルソンの方はね、もう少しそれに関わる文章があるはずですね。

岡　バール・カツェネルソンがイスラエルに渡ったのは1909年、オスマン帝国下ですね。

細見　早かったですね。39年ぐらいにベン・グリオンと喧嘩している。ベン・グリオンはセパレート案ですよ。アラブ人だけの国家をあっちに作り、ユダヤ人だけの国家をこっちに作るという別々の二国家説でやろうとしたときに、バール・カツェネルソンはバイナシヨナリズム、つまり一国家二民族の方です。それで対立しています。44年に亡くなったのは若いけれど、暗殺とか自殺とかではなくて、多分病気だったのではないかと思います。偶然ですが、イツハク・カツェネルソンと同じ年に亡くなっている。でもバール・カツェネルソンはパレスチナで亡くなっている。この従兄弟の関係も面白い。

岡 バール・カツェネルソンのバイナショナリズムも興味ありますね。

細見 ハンナ・アーレントが、「私の神様」なんて言っているので少しびっくりしてしまうんですが。

岡崎 それはアーレントが若いときの発言でしょうか。アーレントもだんだんイスラエル観が変わって行って、アイヒマン論争ぐらいになると、「この国大丈夫か？」といった懐疑的な態度が見え隠れするとは思いますが、「私の神様」なんて言ったのは、40年代くらいでしょうか。

細見 40年代だったと思います。アーレントは一応シオニズム運動に触れていますね。特に30年代。そういうときに、一つの導きになったのがバール・カツェネルソンだったのだろうと思います。ショーレムに言わせるとバール・カツェネルソンは、文章の優れた書き手というよりは、演説の上手な人だった。ハシディズムのレッベのような人だったみたいなのも言っています。アーレントがバール・カツェネルソンを評価していたのは、全体主義とかナチズムの問題をどう考えるかで、彼の言っていることが非常にアーレントに響いたみたいなんです。バール・カツェネルソンはその頃からスターリニズムとナチズムを両方批判していた。アーレントと同じですね。それから、さっき言われたような東ヨーロッパの問題もやはりあると思います。アーレントが育ったのはケーニヒスベルクですから、東ヨーロッパ感覚というのがあって、ロシアが社会主義ロシアになろうがロシアはロシアという感覚をやっぱり持っていると思います。中国の周辺国が、中国が社会主義になろうが資本主義になろうが中国は中国、というのと同じ感覚ですね。つまり抑圧の制度が変わっただけであって、抑圧のシステムがどうであろうと抑圧は抑圧という感覚を持っていると思います。

鈴木 引用していただいた『滅ぼされたユダヤの民の歌』の最後から2行目の「すぐには一致団結するな」というのは誰に向けての言葉なのかなど。これはユダヤ人に対してでしょうか。

細見 いや、すみません、それは訳が分かりにくいという指摘でもあると

思うのですが、訳者としては、海、空、大地に対する呼びかけだと思っています。

鈴木 なるほど、分かりました。ありがとうございます。もしユダヤ人に対してであれば、シオニストとして不思議な言い方だなと思って、ご質問したという次第です。

一つ気になるのは、ワルシャワ・ゲットーにおいて、絶望ということになっていくわけですが、そこでヨブの話をするというのが面白いなと思って。私の理解ですと、ヨブというのは最後、神に試された後に皮膚の病気が治るといふか、許されるというか、救済のメッセージが出てくるというふうに思うんですけども、この段階では、カツェネルソンとしてはワルシャワ・ゲットーの後、ユダヤの民がどこかに生き延びていくというか、生き永らえていたというか、そういった希望をもっていただよう考えられるのでしょうか。

細見 やはりワルシャワ・ゲットーでヨブ記を思い浮かべた人は多かったようです。さっき言いましたイツハク・ツケルマンなんかもワルシャワ・ゲットーの中で、ヨブの訴えが非常に切実だったというふうなことを言っています。ただし、最終的に救済されるんだというところに力点があるよりも、ヨブの苦しみを今我々が苦しんでいるんだという感覚の方が強かったように思います。カツェネルソンの戯曲『ヨブ』にもある意味では自虐的でもあるような場面が非常によく出てくるんですね。

面白いんですね。ヨブ記の冒頭のところで、確か奥さんが神を罵る、あるいは罵るようにヨブに促す場面がありますよね。ああいった場面をカツェネルソンは、悪魔が降りてきて、奥さんの口を通じて語っているというような書き方をします。それから、例えば冒頭の部分に、ヨブが破片でかゆい皮膚をかきむしるという有名な場面があります。カツェネルソンの戯曲では、奥さんに水の甕を取って、それを割ってくれとヨブが言う。何をするかというと、その割った破片で皮膚をかくわけですね。だから改めてゲットーで今我々がまさしくヨブ的な体験をしているという、ほとんど何か自虐に近いぐらいの感覚で書いている気がします。ある場面では悪魔がヨブにのしかかっていたりするんですね。その悪魔がヨブにのしかかっている場面は、芝居として上演され

なかったとはいえ、カツェネルソンは朗読はしたわけで、相当印象深いだろうと思います。確かに、それでも最後には救済が約束されているんだというところに微かな希望は託されていると言えばそうなんですけれども、それよりも、どちらかというところヨブの体験を今自分たちはここでしているという、そういう印象が強いんですね。ただ最後は、何か妙なハッピーエンドで終わる。翻訳としてなんとか出版したいところですが、日本では今、詩集の出版も難しいですが、戯曲はさらに難しい状態です。

「バビロンの河のほとりで」を菅野さんに読んでいただいたら、何か気がついたことを言っていただけでも思うんですね。ユダヤ人のあいだの歴史的な論争上の問題も関わっているような気がするんです。バビロン捕囚をめぐるどうか、エゼキエルの態度とかね。エゼキエルの立場では、これは結局神様の導きだから、その捕囚に従えという方向ですよ。それに対して、戦えとか、いろんな人が出てくる。カツェネルソンが誰に一番共感しているかは必ずしも分からない。ただ出てくる中ではかなり女性の印象が強いんです。エステルというヒロインが出てくる。エステルという名前の女性が一番大事かもしれないと思うのは、カツェネルソンにとってエステルが初恋の人なんです。しかもその初恋のエステルは肺結核で亡くなる。次に出会うのもエステルなんです。その人も何か病気で死ぬんですね。だから、エステルという女性がカツェネルソンの中で大事な位置を占めていることは確かで、その彼が「バビロンの河のほとりで」でヒロインに「エステル」という名前を付けている。だから、これはやはりその人物抜きにはあり得ない、大事な人物のはずなんです、その辺もね、なかなか考えきれないですね。

044

岡崎 ローゼンツヴァイクとかいった哲学者、あとプリーモ・レーヴィといった作家だといろんな証言を残してくれているので、フロイトでもいいんですけど、後世の人から見たときにいろんな解釈ができて、そこからどんどん理解が広がっていく感じがあるのですが、カツェネルソンは文学者で、同時代に味わった生々しいその日常空間の現実を言葉にしたように感じます。だからそこから後世の人が解釈を広げるのは大変ですが、生々しさそれ自体を伝えていくことの重要性みたい

なものも私は感じました。

細見　そうですね。一番思想的なことが書いてありそうなのが『ヴィッテル日記』なのですが、だからどうという思想的、批評的なことがあんまり出てこない。やはり思い出とか、振り返った話とかが出てくる。いわゆる社会評論的なものはあんまりない。よく言えば、やっぱり作品を一生懸命書いた人なのだろうと思います。そのあたりを作品から汲んでいかないといけない。ワルシャワ・ゲッター作品集はヘブライ大学のシェイントッフ教授が編集しています。私も一度会ったことがある人なんですけれど、彼は本当にすごいカツェネルソンのゲッター作品集を作った。解説も添えてあって、分厚い大きな本なのですが、それもやはり基本的には作品なんです。基本的にやはり彼は一生懸命作品を書いた。あとは、翻訳ですね、預言書の翻訳とか。だからそれはそれで文学者としてすごいと思う。今言われたように、作品からこちらが汲み取っていかないといけない。いわゆる真意なんてものをそのまま評論なんかでは書いてくれない。その辺はやはり優れた作家なのだと思います。逆に言えば、そんな真意なんて聞かれても分からないと言うかもしれません。そんなややこしい、そんな難しいこと聞かないでと。自分が書くのは作品だけなんだ、誰が正しいとか、どれが一番いいとかそんなものはないと言うかもしれない。

045

岡　カツェネルソンにおける「ワタン」の話としても非常に興味深かったですし、また、ワタンに関わるテーマとして、「カタストロフとワタン」というものを考えると、例えばパレスチナ人詩人マフムード・ダルウィーシュがサブラー・シャティーラの虐殺について詩を書いています。サブラー・シャティーラでは2000人を超えるパレスチナ人難民が殺されました。ダルウィーシュ自身はその渦中にはいなかったけれども、また、出来事も「絶滅」という規模とは違いますが、ダルウィーシュがその詩に描いた、世界が崩壊していくという感覚を想起しました。

長時間にわたってどうもありがとうございました。これをもって終了させていただきます。